

梅原 猛・伊東俊太郎・安田喜憲……………総編集

# 講座 文明と環境

朝倉書店

## 第5巻

安田喜憲  
林 俊雄  
編集

# 文明の危機

民族移動の世紀

講座 文明と環境

第5巻 文明の危機

民族移動の世紀

安田喜憲  
林 俊雄  
編集

古今書刊

J555-X C3340 P4429E

- 5) 森本六爾：日本農耕文化の起源，303 p.，葦牙書房，1941.
- 6) 村越 潔：砂沢遺跡の水田址. 日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—(日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会)，396-398，1988.
- 7) 中島直幸：初期稲作期の凸帯土器. 森貞次郎博士古稀記念古文化論集 上巻(森貞次郎博士古稀記論文集刊行会)，297-354，1982.
- 8) 佐原 眞：みちのくの遠賀川. 東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集中(岡崎敬先生退官記念事業会)，pp. 266-291，同朋舎出版，1987.
- 9) 佐藤敏也：日本の古代米，346 p.，雄山閣，1971.
- 10) 佐藤洋一郎：稲のきた道，166 p.，裳華堂，1992.
- 11) 須藤 隆：東日本における弥生文化の受容. 考古学雑誌，73 (1)，1-42，1987.
- 12) 杉原荘介：日本農耕社会の形成. 380 p.，吉川弘文館，1977.
- 13) 寺沢 薫・寺沢知子：弥生時代植物質食料の基礎的研究—初期農耕社会研究の前提として. 榎原考古学研究所紀要 考古学論攷 5，1-129，1981.
- 14) 寺沢 薫：稲作技術と弥生の農業. 古代の日本 4 縄文・弥生の生活(森 浩一編)，pp. 291-350，中央公論社，1986.
- 15) 外山秀一：山梨県身洗沢遺跡の立地環境と稲作. 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要，7号，53-67，1991.
- 16) 外山秀一：地理学におけるプラント・オパール分析の応用. 立命館地理学，4号，11-25，1992.
- 17) 和佐野喜久生：稲粒からみた日本稲作の源郷. 考古学ジャーナル，337号，12-18，1991.
- 18) 渡部忠世：アジアの視野からみた日本稲作. 稲のアジア史 2 アジア稲作文化の展開(渡部忠世)，pp. 5-38，小学館，1987.
- 19) 山内清男：石器時代にも稲あり. 人類学雑誌，40 (5)，181-184，1925.
- 20) 山内清男：所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文時代の終末. 考古学，1 (3)，1-19，1930.
- 21) 山崎純男：農耕—西日本後・晩期の農耕—. 縄文文化の研究 2 生業(加藤・小林・藤本編)，pp. 267-281，雄山閣，1983.

## 15. ソバ栽培の起源と伝播

山 田 悟 郎

### これまでの経緯

国内の遺跡で最初にソバの出土が報告されたのは，戦前に発掘調査が行われた縄文晩期前半の埼玉県岩槻市真福寺泥炭層遺跡からである。同遺跡からはソバの他に绿豆，ヒョウタンなどの栽培植物種子も出土したが，農耕もしくは植物栽培は弥生時代になってから始まったとされていた当時，縄文時代の遺物包含層から出土したこれらの栽培植物種子は新しい時代になってから混入したものとして扱われ，省みられることはなかった。

真福寺泥炭層遺跡から出土したソバの種実を再検討する必要が生じたのは1970年代になって，遺跡等の発掘調査に花粉分析などの自然科学的手法が導入されてからである。そのきっかけとなったのが，那須・飯田(1975)によった縄文晩期の青森県三戸郡田子町石亀遺跡の遺物包含層，土器を充填した土壤中から検出されたソバ花粉と，中村(1977)によった縄文晩期の福岡県福岡市板付遺跡の約2800前と推定される層準から検出されたソバ花粉である。相前後して日本列島の南と北の縄文晩期の遺跡から検出されたソバの花粉は，遺跡周辺でソバが栽培されていたこと，また，その時代が約3000年前頃の縄文時代終末期まで遡ることを明らかにしたのである。これらの発見により，真福寺泥炭層遺跡からのソバが後になって混入したものではなく，当時栽培された可能性が強くなってきた。

最近では遺跡の発掘調査に際して土壌のフローテーション(浮遊選別)，花粉分析等の手法を取り入れることが多くなり，ソバの種実や花粉の検出報告のみならず他の作物についても出土が報告されるようになって，日本列島での作物栽培がこれまで考えられていたよりもはるかに古くまで遡ることが明らかになりつつある。ここではそれらの成果によって得られた資料をもとに日本でのソバ栽培の歴史を探ってみたい。

## ソバについて

ソバの原産地： イネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ、キビなど穀物のほとんどがイネ科に属するのに対して、唯一ソバだけはタデ科ソバ属の植物である。ソバの原産地として、フランスの植物学者ドゥ・カンドル (De Candolle, 1883) は栽培の歴史や分布などをもとに、中国東北地区およびシベリア中部のアムール川流域からバイカル湖付近までの地域を発祥の地とする北方説を提唱し、ソ連のヴァヴィロフ (Vavilov, 1926) は中国南部を、中尾 (1967) は中国雲南省付近の山岳地帯をソバの原産地としているが、最近では、遺伝的変異が豊富な中国雲南省付近がソバの原産地であるとする説が有力となっている (氏原・俣野, 1988)。

ソバ属の種の分類については、6種とか8種に類別されるなど研究者によって異なるとともに、地域や時代によっても異なり統一された見解はない。氏原・俣野 (1988) では、普通種 (*Fagopyrum esculentum*)、ダツタン種 (*F. tataricum*)、宿根種 (*F. cymosum*) の3種に大別し、他の種はこれら3種の亜種または変種であるとしている。

ヴァヴィロフ (1926; 邦訳 1980) によると、ダツタン種はもとは普通種の畑での雑草で、主要一次作物の雑草から生じた二次作物とされている。つまり、ソバが気象や土壌条件の変化が伴う北方地域に移動したことにより、人間の意思に関係なく、自然の分化が起こり耐寒性に富み悪条件に耐えるダツタン種が出現したとしているのである。日本では最近になってダツタン種のソバが栽培されたり、明治時代になって葉草として宿根種のソバが導入されるなどしているが、先史時代から存在したソバは、今でも日本や中国などで広く栽培されている普通種のソバであったと考えられる。

記録に登場するソバ： 中国の文献にソバに関する記録がみられるのは北魏末から東魏初め (6世紀頃) に編纂された農業技術書『齊民要術』が最初である。しかし、巻頭の雑説に「秋穀の収穫が終わったら、最先に蕎麦畑を耕し、それから他の畑を耕す。できるだけ深く且つ細かに耕すべく、徒に多きを求めてはならない。(略)凡そ蕎麦をつくるには五月に畑を耕す。三十五日すると埋草が腐熟するから、そしたら轉耕し播種することができる。三遍耕して立秋前後各十日のうちに種く。もし三遍耕しておけば蕎麦も三段に實をつける。下二段の子實が黒くなれば、上一段の子實はまだ白くても、全部に白汁が充満して膿の如くになっているのだから、早速刈り取り、梢と梢とをもたせかけて並べておくと、その白い子實も日と共にすっかり黒く枯れて来る。此れが妙法というものであって、もし上

段の子實まで全部黒くなるのを待って居れば、下段の黒い子實はすっかり滾れ落ちてしまう。」と記述されているだけで、本文中の項目としては登場しない。

日本では『古事紀』の五穀神話にも『日本書紀』にもみられず、8世紀後半の『続日本書紀』になってはじめて登場する。『続日本書紀』巻9の養老6年 (722) 7月19日に発せられた勸農の詔に、早ばつによる凶作にそなえて救荒作物として晩稻、ムギとともにソバの栽培を、勅命によって奨励したことが記されているのがわが国最古の記録なのである。

朝鮮半島で記録に登場するのは15世紀に入ってからであるが、韓国の忠清南道扶余郡扶余で発掘された百済の古都、半月城址東部の軍倉址 (6~7世紀) では、炭化したコメ、コムギ、ダイズ、アズキ、アワ、ソバの出土が確認されており (鑄方, 1977)、記録にはみられないが6~7世紀には栽培されていたことは確実である。

このように、中国では6世紀、日本では8世紀の記録にソバが登場することから、ソバは日本へはイネやアワなどよりも新しい時期に渡来した作物とされてきた経緯がある。しかし、日本でのソバ栽培の歴史はこれまで考えられていたよりかなり古い時代まで遡るのである。

## 遺跡から出土したソバ

縄文前期末~中期： 今のところ、クロフォード (Crawford, 1983) により北海道西南部南茅部町ハマナス野遺跡で、縄文前期末の住居跡床面上より約20cm上位の土壌から検出された1粒の炭化したソバの種実が、日本ではもっとも古いソバである。住居との同時性はみられないが、前期末の土器片集中層直下からの出土であることから住居跡の年代とそれほどかけ離れたものではない。このソバをめぐって一部には最近の農耕活動によったものが紛れ込んだとする指摘があるが土器片集中層の攪乱はなく、その上位に堆積した火山灰層にも攪乱はみられない。したがって、最近になって栽培されたソバの種実が混入したとする根拠はなく、当時栽培されたソバと考えるのが妥当である。出土したソバは図15.1に示したように、果皮が剥離し、3面のうち2面が損壊した最大長4.3mm、最大幅3.1mmの1粒の種実で、形態、計測値ともに果皮をとった現生の普通種に類似したものである。同遺跡からは他にイヌビエ、アカザ属、ウド、キハダ、キイチゴ属、エゾニワトコ、サルナシ属、ウルシ属の種子やクリの子葉が出土しており、植物性食糧資源の多くは野生種の採集によったものの、栽培されたソバも食料資源の一部として利用されていたと考えられる。

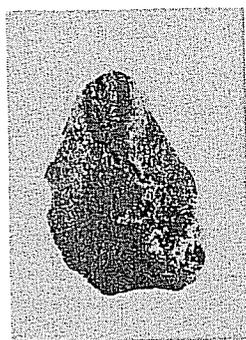


図 15.1 南茅部町ハマナス野遺跡  
(前期末) 出土のソバ



図 15.2 縄文前・中期のソバの種実・花粉検出遺跡分布

ソバの種実はハマナス野遺跡からのみであるが、ソバの花粉についてみると図 15.2 のように新潟県巻町大沢遺跡(前山ら, 1990)と富山県水見市十二町瀧遺跡(安田, 1984)の 2 遺跡で前期の遺物包含層から、塚田ら(Tsukada *et al.*, 1986)によっては山口県宇生賀湿原で縄文前期に相当する約 6000 年前頃の層準から、微細な炭化物片とともに検出されている。縄文前期にソバが存在したことが確認されたのはまだ 4 カ所と少ないが、この頃からすでに日本海沿岸地域でソバ栽培が開始されていたのである。

ところで、クロフォード(1983)によると、前期末のハマナス野遺跡と中期末の同町白尻 B 遺跡から出土したイヌビエ(*Echinochloa crus-gali*)の粒径の比較をした結果、前期末のものに比較して中期末のものが約 20% ほど粒径が肥大するという。粒径の肥大が何によったか定かではないが、イヌビエの馴化(半栽培)が行われた可能性が残る。また、南茅部町のハマナス野遺跡、白尻遺跡、白尻 B 遺跡、北海道中央部余市町フゴッベ貝塚など、円筒式土器文化圏内の縄文前期から中期の住居内出土のヒエ属(*E. sp.*)種子を検討した吉崎(1992)は、4 遺跡から出土したヒエ属種子は現生の栽培ヒエ(*E. utilis*)とは形態的に若干異なるもの

の、野生種であるイヌビエとも異なり胴部の膨らみ大きいという。これらのヒエ属種子が野生のものか栽培されたものかは不明であるが、前期から中期にかけてイヌビエの粒径が増大する現象となんらかの関連があるものと考えられる。

最近話題となっている、青森県三内丸山遺跡の発掘調査ではヒョウタン、ゴボウ、シソ属などの栽培植物の存在が明らかにされるとともに、イヌビエのプラント・オパールが検出され、イヌビエ栽培が問題となっている。しかし、青森県内ではすでに富ノ沢(2)遺跡の縄文中期の住居内から 2000 粒を超えるヒエ属種子が出土し、現生のイヌビエに近いものから栽培ヒエに類似したものまでみられることが報告されており(吉崎, 1992)、三内丸山遺跡でも発掘された住居跡などの遺構に伴ったイヌビエのプラント・オパールや炭化種子の検出が期待される。

このように津軽海峡を挟んだ両地域からヒエ属種子が出土し、その利用が論議され始めた点に関しては、ソバ栽培開始との関連からも注目される。石皿、磨石といった石器が多量に出土しはじめるのも前期頃からであり、北海道西南部の遺跡から炭化したクリの子葉や漆器などが出土しはじめるのもやはり前期後半から末期にかけての時期である。この頃植物利用にかかわる新しい技術が開発されるか、渡来してきたことが予想される。

縄文前期から中期の遺跡からはソバ以外にも、福井県鳥浜貝塚からヒョウタン、アサ、エゴマ、ゴボウ、緑豆(笠原, 1986)、長野県大石遺跡や荒神山遺跡などで出土したパン状炭化物からのエゴマ(松谷, 1984)、青森県三内丸山遺跡のヒョウタン、ゴボウ、シソ属などが出土している。縄文前期から中期にかけて外来種としての 5 種類の栽培植物や漆器が出土する事実は、この時期に栽培植物をも含めた大陸文化要素が日本へ渡来し、縄文社会の中に受け入れられていたことを示す有力な証拠となる。

縄文後期～晩期： 縄文後期になると、日本海に面した福井県福井市浜島遺跡(那須ら, 1980)、北海道小樽市忍路土場遺跡(山田, 1992)の 2 遺跡からソバの花粉が検出され、この時期にもソバ栽培が行われていたことが確認されている。

小樽市の西方に位置する忍路土場遺跡は、小河川の旧氾濫原に位置した低湿地遺跡で、背後の段丘上には国指定の重要文化財となっている環状列石(ストーンサークル)や住居跡が分布している。河川沿いの低湿地部からは 7 カ所の作業場跡や多量の遺物が出土しており、段丘上に住んだ人々の生活の場であったと推定されている。発掘されたのは後期中葉(約 3500 年前頃)の遺物が主で、土器、石器はもとより数多くの植物性遺物が出土している。浮子、ヤス、タモ枠、くさび、

石斧柄、ヒキリ棒・板、横槌、杵形木製品、皿形容器、片口舟形容器、鉢形容器、<sup>すく</sup>掬い具、弓などの木製品、樹皮製容器、敷物状、すだれ状、カゴ状、<sup>せん</sup>釜状、環状の繊維製品、各種の縄、赤色・黒色漆塗櫛、木胎漆器、彩色編布、朱漆染(?)糸、漆が貯められた土製・樹皮製容器などがあり、乾燥した台地上の遺跡では知り得ない、当時の生活をより具体的に復元できる生活用具の存在が明らかになっている。生活用具だけではなく、ニシン、カレイをはじめとした12種の魚骨、4種の貝、4種の鳥類とヒグマ、ニホンアシカなど10種の哺乳動物の骨、オニグルミ、クリ、トチノキの堅果や、ハイイヌガヤ、ヤマブドウ種子など29種類の植物遺体、シジミなどの海産動物にハイイヌガヤ等の木の実を混ぜて貝殻に詰めて高温で焼かれたパン状炭化物など、食糧資源とされた遺物も多量に発掘されている。植物遺体中にはゴボウ、シソ、ホオズキといった栽培植物種子が含まれており、主包含層の数カ所からソバの花粉(図15.4)が検出されるなど、遺跡周辺でソバや蔬菜の栽培が行われたのは明白である。

遺跡から出土した土器、石器、木製品、繊維製品、植物遺体や動物遺体、製作にあたっては高度の技術と時間を要したであろう各種の漆器の存在、そして環状列石の造成といった土木事業などが行われていたことなどを併せ考えると、自然

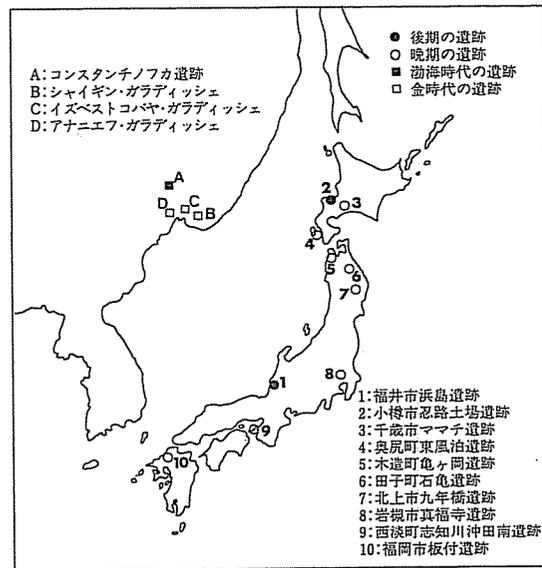


図 15.3 縄文後・晩期のソバの種実・花粉検出遺跡分布

界の産物を巧みに利用する高度の技術が発達し、豊かな自然を背景としての採集・漁労・狩猟活動とともに有用植物の栽培も加わって、安定した食糧供給が確保されていたと推定できる。

次に続く縄文晩期になると、遺跡からのソバ花粉の検出例が増加し、これまでに九州から北海道までの8遺跡でソバ栽培が行われていたことが確認されている。それまでソバ花粉が検出されていたのは日本海沿岸部に限られていたが、図15.3に示したように淡路島、京都市、千葉県、青森県や岩手県(図15.4)の内陸部などからも検出され、この時期になってソバ栽培の範囲が拡大したことを物語っている。

#### ソバ栽培の開始時期

遺跡から出土したソバの中でもっとも古いのが先にあげた北海道西南部南茅部町ハマナス野遺跡からの1粒のソバの種実であるが、遺跡以外では岩手県花泉町に分布する更新世最終氷河期の花泉層(島倉, 1974)や長野県信濃町の野尻湖層(那須, 1981)、完新世初期の青森県北八甲田田代湿原の約9300年から8500年前の層準(辻ら, 1983)などのより古い堆積年代を示す地層から検出されているソバ属花粉がある。野尻湖層と花泉層のものについてはダットン種の可能性が指摘され(那須, 1981)、田代湿原のものについても更新世から完新世初期にかけての日本にソバ属植物が自生していた可能性が指摘されている。かつての日本列島にソバ属植物が自生していた可能性は否定できないが、ダットン種のソバが自生していたとする点には疑問が残る。ヴァヴィロフによると、ダットンソバは普通種のソバ畑の雑草であり、アルタイ、カシミールなどの普通種のソバが育たない高山地帯で栽培される、主要一次作物の雑草から派生した二次作物とされたもので、ソバ栽培が行われた可能性がない氷河期の日本列島にダットン種のソバが存在したとは考えられない。

まだ大陸側の中国などでは、日本のように縄文時代の古くまで遡るソバは発見されていないが、日本列島には自生のソバがみられないことから、縄文時代の遺跡から発見されたソバについては普通種のソバが栽培型の形態を備えて大陸から渡来してきたと考えるのが妥当であろう。出土が確認されているソバの大半は縄文後・晩期の遺跡からだが、福井県から北海道西南部までの前期末から中期の遺跡からも出土しており、これまで推定されていたよりも古い時代までその栽培の歴史は遡る。

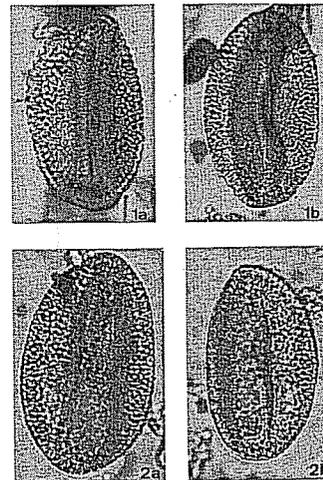


図 15.4 縄文後・晩期の遺跡から検出されたソバ花粉

1a, b: 小樽市忍路土場遺跡(後期)  
2a, b: 北上市九年橋遺跡(晩期)

縄文前期は日本海に対馬海流が本格的に流入し、気候が温暖となり、海面が上昇して内陸域まで進入した縄文海進の時代にあたる。遺跡から栽培植物の出土が報告されるのもこの時期からで、鳥浜貝塚からはヒョウタン、ゴボウ、エゴマ、シソ、アサ、緑豆の出土が確認されている。同貝塚からは漆器も出土しており、漆を利用する技術も渡来していたことが明らかにされている。やはり前期の千葉県大坪貝塚や滋賀県粟津湖底遺跡でもヒョウタンの種子や果皮が出土し、長野県大石遺跡や荒神山遺跡などのパン状炭化物中からはエゴマの種子、先にあげた青森県三内丸山遺跡のヒョウタン、ゴボウ、シソ属など、日本に自生しない植物が出土する。大陸を原産地としたこれら栽培植物の出現は、縄文前期からその有用性をもとにして、当時の人々がこれらの栽培植物を受け入れたことを示すもので、鳥浜貝塚などからは出土していないが、ソバもこれらの作物と同じ頃に日本列島に渡来していた可能性が強い。ソバ、シソ、エゴマはいわゆる照葉樹林帯を原産地とする植物で、漆の利用も照葉樹林帯で発生した技法である(中尾, 1967)。一方、ゴボウやアサはナラ林帯の北方系作物群としてまとめられる植物とされている(中尾, 1983)。ソバも北方系作物群の一員とされているが(佐々木, 1984)、ソバは照葉樹林帯で発生したもので佐々木(1984)が指摘するナラ林文化の構成員となったのは、後述のようにもっと後のことと考えられ、この時期に出現するソバは照葉樹林帯要素の一部と考えるべきである。このように、縄文前・中期には大陸の照葉樹林帯とナラ林帯で利用が開始されていたいくつかの栽培植物が大陸のどこかで集約されたか、別々の経路をたどったかして日本列島の日本海沿岸域に渡来していたのである。

照葉樹林帯とナラ林帯から渡来してきた作物を取り込んだ縄文前・中期の段階は、佐々木(1988)によって提唱された、採集・狩猟・漁労活動が主たる生業活動として営まれたが、それらによる生産のごく一部を補う程度のごく小規模な農耕も行われたとする、原初的農耕段階に達していたと考えることができる。日本に渡来してきたソバなどの作物と漆器製作技術はその有用性から、温暖な気候を背景として照葉樹林帯域を越えて長野県や東北地方、北海道西南部などのいわゆるナラ林帯まで分布域を拡大したのである。

縄文時代前期頃に渡来したこれらの作物が、渡来当初から連綿として日本列島内で栽培し続けられたのであろうか。栽培技術が確立していない当時あっては何度かの断絶があり、組み合わせを変えた作物群が何度かにわたって大陸から渡来していたと考えるべきであろう。第1回目はこれまで述べた縄文前・中期頃の

できごとであり、2回目は後期から晩期にかけた時期、3回目が水稲稲作が本格的に開始された弥生時代である。

岡山県ではコメの籾痕がついた縄文後期の土器片の出土が相次ぎ(高橋, 1992)、青森県では後期の住居内から炭化米が出土するなど(吉崎, 1992)、コメの利用は縄文後期には開始されていたことが明らかにされつつある。だが、この時期のコメに関する資料は少なく、それが水稲稲作なのか焼畑での陸稲によったものかは不明ではあるが、籾痕がついた土器片や炭化米の存在から、縄文後期からすでにコメ栽培が始まっていたことは確かである。後期から晩期にかけた西日本の遺跡ではアズキ(?), ツルマメ, エンバク, ヒエ, キビ, アワなどの出土が確認され(寺沢ら, 1981)、ソバの花粉も日本列島の8遺跡から検出されるなど(山田, 1992)、雑穀栽培のウエイトが高まるようすをみせる。さらに、晩期になると北九州で水稲稲作にかかわる遺構や遺物が出土し始めるなど、北九州では、雑穀栽培から水稲稲作へ移行する動きもみえる。前・中期に栽培されたのはエゴマやシソなど蔬菜的な栽培植物であるが、後・晩期になって出土した栽培植物の種類をみると、アワ・キビなどといった雑穀も出土し始める。この時期の西日本の縄文文化は佐々木(1988)によって提唱された、主食糧生産の大半を焼畑などの農耕でまかなっているがその生産の安定性が十分でなく、採集(半栽培)や漁労活動の比重がなお高い、時には農耕とその他の生業活動の比重が逆転することもあるとされた、初期的農耕段階(照葉樹林焼畑農耕)に達していた可能性が強い。この時、東日本には環境に適応したソバやシソをはじめとした栽培植物、漆器の製作技術などの文化要素が取り入れられ、亀ヶ岡文化にみられるような独特な文化発展の基盤をつくり出したのではなかろうか。

ところで、縄文晩期が気候の寒冷期にあたっていることが阪口(1982)によって指摘されている。ソバの花粉が検出される遺跡が晩期になって東日本で増加する傾向をみせることから、この時気候の寒冷化にも適応できるソバが急速に東日本の縄文社会の中に取り込まれていったことが考えられる。

弥生時代に入るとオオムギ、コムギ、ヒエ、アワ、キビ、ジュズダマ、アズキ、ダイズ、ササゲ、エンドウ、ソラマメ、リョクトウとともにソバも出土する(寺沢ら, 1981)。縄文末の遺跡から出土する作物もみられるが、その多くは弥生時代に入ってから新しく登場する作物で、水稲稲作だけではなく畑作によった栽培植物も数多く日本に渡来してきたことがわかる。ソバについても、以前から栽培されていたものが継続されたことがあったかもしれないが、この時新たに渡来して

きた畑作物群の中にも含まれていた可能性が高い。

### ソバの渡来ルート

それではソバはどのようなルートを通して日本列島に渡来したのであろうか。ソバの渡来ルートを考える上で大きな影響を与えたのが、加藤 (1981) による大陸沿海地方もしくは沿アムール川地方からとする指摘である。加藤は、「(略)アムール中・下流と北海道との縄文後・晩期における文化交流の中に、ソバ栽培という文化要素が流れ込んできた可能性があるのである。(略)」として、その頃北海道西南部や東北地方の縄文晩期の遺跡から発見され始めていたソバの花粉が、大陸から渡来したソバを母植物としたものである可能性が高いとした見解を発表している。以後、日本へのソバの渡来ルートの1つとして沿海地方から日本海岸へとするルートと、アムール川下流域からサハリンを經由し北海道へとするルートが描かれることとなる。

しかし、この見解が発表された時点では沿海地方でも沿アムール川地域でも縄文晩期まで遡る遺跡はもとより、より新しい時期の遺跡からもソバの出土は報告されていない。

ヤヌシェヴィッチら (Yanushevich *et al.*, 1990) により、ロシア沿海地方の14遺跡から出土した栽培植物が報告されているが、その中で、ソバは日本の縄文晩期よりかなり新しい金時代 (12~13世紀) のシャイギン・ガラディッシェとアナニエフ・ガラディッシェの2遺跡からのものが記載されているだけであった。図15.5はシャイギン・ガラディッシェとアナニエフ・ガラディッシェの2遺跡から出土したソバである。

この報告があった3年後に、ロシア科学アカデミー極東支部の研究所で、同研究所が保管していた沿海地方の初期鉄器時代 (紀元前10世紀頃) から金時代までの13遺跡から出土した栽培植物について調査する機会があった。研究所に保管されていた資料中で存在が確認できたものとしては、渤海時代 (8~10世紀) のコンスタンチノフカ遺跡からの作物群に含まれていたソバがもっとも古いものであった。紀元前10世紀頃から紀元7世紀頃までの初期鉄器時代や鉄器時代の8遺跡からも畑作物が出土しているが、オオムギやキビ、アワが主でソバは破片も含まれていない。コンスタンチノフカ遺跡でもオオムギ、コムギ、アワ、キビ、アズキ、エゴマ、アサ、モロコシに混じってわずかな量のソバが出土するだけで、他の作物と比較してその量は微々たるものである (山田, 1994)。ソバが他の作物に近い

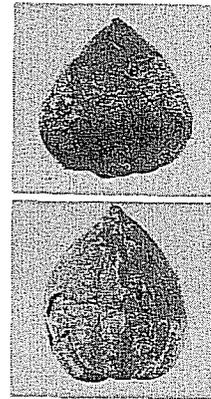


図 15.5 ロシア沿海地方出土のソバ  
上: シャイギン・ガラディッシェ (金時代)  
下: アナニエフ・ガラディッシェ (金時代)

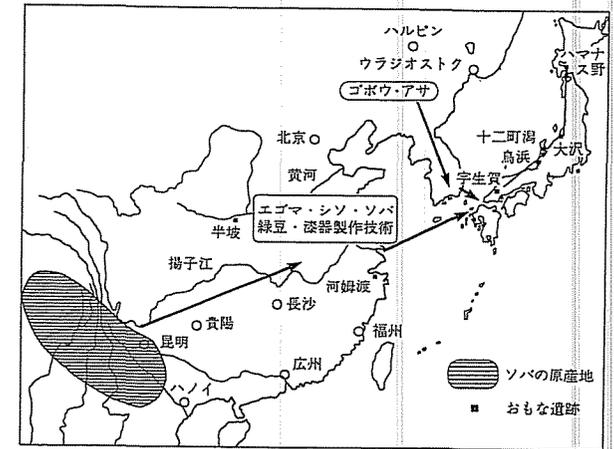


図 15.6 縄文時代におけるソバなどの渡来ルート

比率で出土するのは金時代 (12世紀) になってからであるが、同時代の5遺跡のうちソバは3遺跡で出土しただけである。5遺跡から共通して出土するのはやはりオオムギ、キビ、アワ、アズキであり、オオムギやキビなどに近い比率でソバがみられるものの主作物になっていなかった可能性が高い。このような現状では、沿海地方でのソバ栽培の歴史は8世紀頃まで遡るのがやっとで、これまでの指摘にあった縄文後・晩期に相当する古い時代には存在せず、紀元後の新しい時代に畑作物群に加わったものであるといわざるをえない。

したがって、縄文時代晩期に東北地方や北海道西南部で行われていたソバ栽培の起源を大陸沿海地方に求めることはできず、沿海地方から日本海を越えて渡来したり、サハリン・北海道を經由した可能性が指摘されてきたソバの渡来ルートは存在しなかったことになる。ただ、沿海地方から直接日本海を越えたのか、アムール川下流域からサハリンを經由して渡来してきたかは不明であるが、沿海地方で栽培されたオオムギ、キビ、アワなどが、7~8世紀頃に北海道北部で展開されたオホーツク文化の集団に渡来しており (山田・椿坂, 1995)、大陸から北回りて栽培種が渡来したルートが存在したのは確かである。

ソバの渡来ルートとして残されたのは中国の江南周辺の照葉樹林帯からか、もしくは朝鮮半島を經由したルートである。しかし、朝鮮半島から出土した栽培植物としてあげられているのはイネ、オオムギ、コムギ、アワ、キビ、ヒエ、モロ

コシ、ダイズ、アズキでソバは含まれておらず(後藤, 1994), 朝鮮半島でのソバ栽培を示す証拠は6~7世紀の百済の古都半月城址の軍倉からのものだけで(鑄方, 1941), 朝鮮半島が縄文時代に渡来したソバのルートとなっていたか否かは不明である。中国についても遺跡からの出土は不明で、ソバが大陸内でどのような経路をたどって東シナ海岸もしくは日本海岸に達したかについては、今後の調査成果を待たなければならない状況である。

大陸内での経路ルートは不明だが、原産地が中国雲南地方とされるソバが縄文時代の日本列島に達していたのは事実である。確たる証拠はないが、現状では、縄文時代のソバなどの栽培植物は図15.6に示したような、照葉樹林帯文化が日本に渡来したと推定されている中国揚子江下流域付近から西日本につながるルートを通して、縄文時代前期頃にまず第1回目の渡来があったと考えるのがもっとも考え易いのではないだろうか。

#### 北海道で栽培されたソバ

北海道では縄文時代前期末からソバの種実が出土し始めるが、ソバをも含んだ雑穀農耕が生業形態の中に取り込まれたのは、7世紀後半から12世紀にかけて日本最後の土器文化が展開された擦文時代になってからである。縄文時代初めから擦文時代までの約7000年間の中でも、前の時代に比較して大幅な変化をみせたのが擦文時代で、土器からは縄文が消え、石器から鉄器へと利器が変わり、住居の構造も円形なものから方形で造り付けのカマドをもったものになるとともに、この時、生業形態も雑穀農耕へと大きく転換する。

4世紀頃から東北地方の農耕文化と密接な交流関係が保たれていたことは、東北地方各地の遺跡からその当時北海道で使用された土器が出土することなどから推察されており、擦文時代に移行する以前から東北地方の影響を受け、雑穀農耕を受け入れる基盤が整備されつつあったことが、擦文時代になって急速に雑穀農耕が北海道で展開された要因としてあげられる。しかし、雑穀農耕が生業の中に大きく取り入れられていた8~12世紀頃にかけては気候の温暖期にあっており(吉野, 1982; 阪口, 1984), 北海道で雑穀農耕が発展したもう1つの要因として温暖な気候が大きく作用したことを見逃すことはできない。流水が押し寄せる北北海道のオホーツク海沿岸部は、穀物栽培を目的とした畑作農耕に適さないため現在は牧草地が広がっているが、擦文時代の10世紀後半から12世紀頃にはオオムギ、キビ、ソバ、アサ、シソなどを栽培する雑穀農耕が行われていたのである。

しかし、流通経済が発達し始める13世紀には擦文文化は崩壊しアイヌ文化に移行し、5世紀にわたって行われた雑穀農耕もこの時からマイナーなものとなる。擦文時代末期には本州から多種の本州製品が急激に流入し始めたときされており、急激な物資の流入が擦文文化崩壊のきっかけとなった可能性がまず考えられる。一方、13世紀頃から気候の寒冷化が始まったとする指摘があり(吉野, 1982; 阪口, 1984), 寒冷気候がそれまで行われた雑穀農耕に悪影響を及ぼしたことも考えられ、気候悪化による雑穀農耕の衰退も擦文文化崩壊の一因となったのかもしれないのである。

以後はアイヌ民族によって雑穀栽培が継続されるが、擦文時代の規模で農耕が行われた形跡はみられなくなる。縄文時代から行われてきた北海道でのソバの栽培も、図15.7に示したように西南部に居住した和人集団の中では行われていたものの、アイヌ民族によって栽培されたのか、栽培されなかったのかは不明な状態となる。

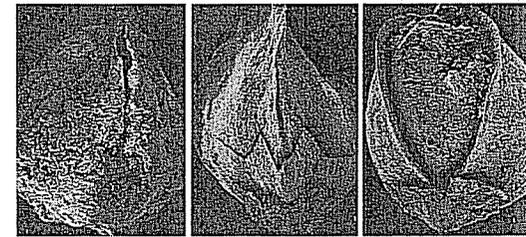


図 15.7 北海道の擦文時代・中世の遺跡から出土したソバ

#### 文 献

- 1) Crawford, Gary: Paleoethnobotany of the Kameda peninsula Jomon. Museum of Anthropology, No. 73, University of Michigan, 1983.
- 2) 後藤 直: 朝鮮半島原始時代農耕集落の立地. 第四紀研究, 33 (5), 285-302, 1994.
- 3) 鑄方貞亮: 日本古代穀物史の研究, 吉川弘文館, 1977.
- 4) 笠原安夫: 栽培植物の伝播. 季刊考古学, 第15号, 48-52, 1986.
- 5) 加藤晋平: 北アジア史の中で, 北見市史, 上巻, 207-246, 1981.
- 6) ドゥ・カンドル (加茂儀一訳): 栽培植物の起源, 改造社, 1941.
- 7) 前山精明・藤田英忠: 巻町大沢遺跡における縄文時代中期前葉集落の植物利用. 巻町史研究, IV, 1-20, 1990.
- 8) 松谷暁子: 走査電子顕微鏡による炭化種実の識別. 古文化財の自然科学的研究(古文化財編集委員会編), pp. 630-637, 同朋舎出版, 1984.

- 9) 中村 純：稲作の起源をさぐる-花粉分析。数理科学, No. 170, 41-46, 1977.
- 10) 中尾佐助：農業起源論。自然生態学的研究(森下正明・吉良竜夫編), pp. 329-494, 中央公論社, 1967.
- 11) 中尾佐助：東アジアの農耕とムギ。日本農耕文化の源流(佐々木高明編), pp. 121-148, 日本放送出版協会, 1983.
- 12) 那須孝悌・飯田祥子：青森県石亀遺跡(縄文晩期)の花粉分析。青森県田子町石亀遺跡第2・3次発掘調査概報, 6-10, 1975.
- 13) 那須孝悌・山内 文：縄文後・晩期低湿地性遺跡における古植生の復元。自然科学の手法による遺跡古文化財の研究, pp. 158-171, 日本学術振興会, 1980.
- 14) 那須孝悌：縄文人はソバを食べた?。科学朝日, 481号, 52-55, 1981.
- 15) 佐々木高明：ナラ林文化。月刊みんぱく, 8(9), 236-238, 1984.
- 16) 佐々木高明：日本における畑作農耕の成立をめぐる。畑作文化の誕生(佐々木高明・松山利夫編), pp. 1-22, 日本放送出版協会, 1988.
- 17) 阪口 豊：日本の先史・歴史時代の気候。自然, 5月号, 18-36, 1982.
- 18) 島倉巳三郎：古代遺跡から出るソバの花粉。古代学研究, 62, 34, 1974.
- 19) 高橋 譲：縄文時代の粃痕土器。考古学ジャーナル, 355, 15-17, 1992.
- 20) Matsuo Tsukada, Sugita Shinya and Tsukada Yoko: Oldest primitive agriculture and vegetational environments in Japan. *Nature*, 322, 632-634, 1986.
- 21) 辻誠一郎・宮地直道・吉川昌伸：北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植物変遷。第四紀研究, 24(4), 301-313, 1983.
- 22) 寺沢 薫・寺沢和子：弥生時代植物質食料の基礎的研究。樺原考古学研究所紀要, 第5冊, 1-129, 1981.
- 23) 氏原暉男・侯野敏子：ソバの系統とその起源を探る。畑作文化の誕生(佐々木高明・松山利夫編), pp. 145-164, 日本放送出版協会, 1988.
- 24) ヴァヴィロフ(中村英司訳)：栽培植物発祥地の研究, 八坂書房, 1980.
- 25) 山田悟郎：古代のソバ。考古学ジャーナル, 355, 23-28, 1992.
- 26) 山田悟郎：ロシア沿海地方から出土する栽培植物について—ソバとオオムギを中心として—, 1993年度北の歴史・文化交流研究事業中間報告, 北海道開拓記念館, pp. 29-50, 1994.
- 27) 山田悟郎・椿坂恭代：大陸から伝播してきた栽培植物。北の歴史・文化交流研究事業研究報告, pp. 107-134, 北海道開拓記念館, 1995.
- 28) Yanushevich, Z. V., Vostretsov, Yu. and Makarova, S. A.: 沿海州における民族植物学的遺物, ソ連科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所, ウラジオストク, 1990.
- 29) 安田喜憲：環日本海文化の変遷—花粉分析の視点から—。国立民族学博物館研究報告, 9(4), 761-798, 1984.
- 30) 吉野正敏：歴史時代における日本の古気候。気象, 26, 11-15, 1982.
- 31) 吉崎昌一：古代雑穀の検出—考古植物学的調査の展開—。考古学ジャーナル, 355, 2-14, 1992.
- 32) 吉崎昌一：青森県富ノ沢(2)遺跡出土の縄文時代中期の炭化植物種子。青森県富ノ沢(2)遺跡IV発掘報告書 No. 3, 1097-1110, 1992.

## 16. 稲作の伝播と日本神話の変容

小林 道 憲

### オホゲツヒメとウケモチ

よく知られた説話だが、『古事記』に語られているオホゲツヒメの死体化生説話には、縄文時代の狩猟採集生活から弥生時代の農耕生活への移行が象徴的に語られている。

高天原から追放されて下界へ降ってきたスサノヲは、まず食物をオホゲツヒメに求める。オホゲツヒメは、鼻や口や尻からいろいろの御馳走を出して、料理をして差し出す。この時、スサノヲは、その仕業を覗いて、汚いことをして食べさせると思い、オホゲツヒメを殺してしまう。殺されたオホゲツヒメの屍体の頭から蚕が、目から稲種が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から麦が、尻から大豆が生まれてきた。これをカムムスヒが取って種としたという。

この死体化生説話は穀物と農業の起源を物語っているが、ここに出てくるオホゲツヒメは、人間に様々な生きる糧を与えてくれる大地の恵みを象徴している。だからこそ、スサノヲから求められれば、それに応じて、オホゲツヒメは次々と食物を無尽蔵に出してくるのである。この食物を無尽蔵に出してくるオホゲツヒメは、おそらく、まだ日本人が狩猟採集生活を営んでいた縄文時代の母なる大地の女神だったのであろう。今日次第に明らかになってきているように、わが国の縄文時代の狩猟採集生活は相当に豊かな生活であったようで、人々は、海や潟湖や山や里の豊かな幸に恵まれて生活していたようである。そのような豊かな幸を無尽蔵に恵み与えてくれる母なる大地への敬慕の念が、鼻や口や尻からいろいろの御馳走を出してくれる女神として崇敬されたのも、不思議ではない。

もちろん、縄文時代は、必ずしも、すべてが狩猟採集経済によってのみ成り立っていたわけではない。すでに縄文晩期には栽培農業が始まっており、大陸から伝播した簡単な稲作も、北九州の先進地域を中心に始まっていた。そして、この稲作をはじめとした穀物の栽培はかなり急速な勢いで本州全土に広がり、かくて、農耕生活を中心とした弥生時代が始まった。